きりすとこどもえん　5月園だより

２０２２年度　年主題〈つながって～今、わたしを生きる～〉

0･1･2歳児５月主題「なにかな」「おもしろい」

月のねがい

◎神さまに守られて安心して過ごす。
◎好きな保育者のそばで、いろいろなものに手をのばす。
◎さんびかに親しみ、心地よさを感じる。
◎新しい環境や生活リズムに慣れて、興味が広がる。

3･4･5歳児５月主題　「心地よく」

月のねがい

◎日常の中で保育者や友達と賛美歌を歌い、お祈りし、神さまを身近に感じる
◎自分の好きなことや遊びをしながら、周りの子どもや保育者を感じる。
◎神さま・イエスさまが一緒にいてくださることを喜び、安心する。
◎春から夏への移り変わりの中、心身を開放し、喜んで過ごす。

今月の聖句　「新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。」

詩篇９６：１

聖書に出てくる最初の言葉は、「初めに、神は天と地を創造された」（創世記１：１）です。聖書の神さま、キリスト者が信じる神さまは、創造の神です。私たち人間を含めた、この地上にある全てのものを造られたお方です。

自然は私たちの心を癒してくれます。マイナスイオンの出る森林と小川、世はそれをパワースポットと呼ぶ場合もあります。日本には四季があり、それぞれの季節を楽しむことが出来ます。目で見て楽しみ、手や肌で触れて楽しみ、食して楽しみます。自然界、造られたものそのものが神なのではありません。

アメリカのナイアガラの滝を見て、ある日本人観光客が、その壮大さに感動し、思わず叫んだそうです。「これは、私のお父さまのものだ」。どういう意味か分からずに、周りの人がそう叫んだ観光客に真意を尋ねました。すると、その人は、「これは創造主なる神さまが造られた大自然です。そのお方は、私をも造られた私の父でもあられます。ですから、この素晴らしい滝は、私のお父さまのものなのです」と答えました。

聖書の書物の一つ、詩篇も同じことを語ります。自然そのものが神ではないけれども、自然は明らかに神を、創造の神の偉大さを指し示している、と。今月の聖句である詩篇第９６篇１節の言葉、「新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え」とは、そういう意味なのです。

協力牧師　池田基宣

5月の行事予定

9~14 日（土）	家庭訪問（3 才以上）
10　日（火）	誕生会（2 才以上 4･5 月生）
11　日（水）	役員会
12　日（木）	交通安全教室・弁当日
19　日（木）	健康診断（13:30 ～）
21　日（土）	親子遠足・父母会総会・弁当日
24　日（火）	避難訓練
28　日（土）	誕生会（めぐみ組 4~6 月生）

6月の行事予定

2 日（木）	誕生会（2 才以上 6 月生） 歯科健診
4 日（土）	職員研修
6~10 日（金）	フリー参観＆給食試食会 （3 才以上クラス）
7 日（火）	役員会
15 日（水）	弁当日
21 日（火）	避難訓練
22 日（水）	弁当日
18･25 日（土）	親子あそびの会（自由）

自然の恵みの中で育つ

新入園児や、進級してちょっぴり不安な在園児も、泣き声の多かった園生活が、少しずつ落ち着きに変わってきています。そんな4月のある日。なんと！新しいウサギのお友だちがこども園に入園してきました。その名もズバリ**「さねふみくん」**。2歳の男の子です♪

やって来た2日間ほどは、ゲージに入れて事務室前でお世話をしていました。2階のお友だちはトイレに降りてくるたびに「さーねふーみくん♪」と、ゲージの中をのぞき込んだり、めぐみさんやひかり組さんも、「うさぎー！」と、嬉しそうに見にきていました。ウンチやおしっこをしたり、ゲージの中で立ち上がったりすると、「さねふみくんすごーい！」と大喜びです。みんな間近で見たり触れられることがすごく嬉しかったようです。数日したらみんみんくんと一緒に過ごすことを子どもたち伝えると、「けんかしないかな？」「ごめんねできるかな？」「仲良くご飯食べれるかな？」と、子どもたちなりに心配な様子。そんな風に自分のことのように相手？のことを思えるって素敵ですよね！ウサギ小屋に入れた初日、園庭で遊びつつ、ウサギ小屋の前に行って心配そうに見つめる子どもたち。「あ！みんみんと近づいてる！」「2人でクンクンしてるよ～！」「穴掘ってる～！」などなど、2羽のウサギの行動に一喜一憂している子どもたちの姿は、目が輝いてとってもかわいかったです。

5月になると、園庭や園の周りにたくさんの生き物たちが姿を見せ始めます。ダンゴムシ、カタツムリ、ちょうちょ、バッタ、トカゲなどなど…。様々な身近な自然の生き物に関わりながら、興味を持って調べたり飼育したりすることを通して、生き物への愛着を感じたり、命の大切さに気付いたりするような心はずませる経験ができることを願っています。

主任:冷水

あそびは育ちの栄養源

センダンの薄紫の花が雪のように舞い散り、新緑の木々の薫りが園庭を包んでいます。今が盛りの種々の花々が、美しい彩りを添えて微笑んでいるようです。肌寒い朝と夏のような日中との体温調整が難しい季節でもあります。暑い夏に備えて、園庭や公園でたくさん遊びこんで、強い体を作っていきたいものです。

新年度を迎えて、あっという間に三週間が過ぎました。玄関での泣き声もずいぶん少なくなり、少しずつ自分の居場所を見つけ始めた子どもたち。周囲の様子を観察しつつ、一日の流れや約束事を理解し始めています。周囲の子どもたちのことにも関心が向き、関わりも高まってくるでしょう。それに伴い、自己主張の衝突も出てくるということになります。いつも仲良く遊んで欲しいと大人は願いますが、様々な心の葛藤や交流を経て、互いを認め合う関係になっていくのを見守ることも大切ですね。何よりも保護者の皆さんが、お子さんのありのままをしっかり受け止めてくださる安全基地であることです。「泣いてもいいんだよ！」「いっぱいあそんでおいで！」それが見えない根を支える大地なのです。

さて、「遊び」を国語辞典で引くと、いくつか目に「気持ちのゆとり」と「機械の連結部分に少しゆとりがあること」とあります。いわゆるハンドルの遊びと言われるもの。私は常々、大人こそこの「遊び」が必要ではないかと思うのです。子どもへの愛情の下に、何歳だからこれができなければならない、中学生ならこうあるべしと、型にはめて押しつけるのは如何なものか。レーシングカーのように「遊び」の少ない運転で、大人に併走されると、子どもの運転も振動（困難）が拡散されず、大事故に繋がってしまうのではと思うのです。我々の心の余裕もこれと同じことですね。どうしても譲れない一線も必要でしょうが、厳格すぎてもあちらこちらに角が立ってしまいます。それに比べて、子どもたちの「あそび」には、まさに本能的・天才的な間（余裕）が存在しているようです。遊びは、子どもの活動と学びの原点。心や体の発達や、社会性、情緒面、それから耐性（我慢すること）、そしてやってよかったという達成感の発達などが促進されるのです。

後白河法皇により編纂された和歌集「梁塵秘抄」に、「遊びをせんとや生まれけむ　戯れせんとや生まれけん　遊ぶ子どもの声聞けば　わが身さへこそ揺るがれ」という和歌があります。まさに幼児の生活は遊びをするためにあるという本質は、いつの世も同じということですね。集団の中で生まれる絶妙な距離感と自己主張のバランスが、『遊びをせむとや生まれけむ』子どもの真骨頂。私たちもほどよい「遊び」を持って、日々楽しんで子どもたちに接していきたいものです。

子どもによっては、そろそろ疲れが出始める頃です。連休をご家族で楽しまれながら、どうぞ十分な休養もお願いしたいと思います。コロナもまだまだ注意が必要ですが、梅雨時を元気に乗り越えるためにも、毎日の変化に応じた対応や食事・睡眠に留意し、保護者の皆様のご協力をいただきながら楽しい園生活を支えていきたいと思います。

学園長

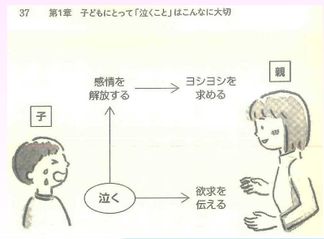
子どもの泣くわけ

阿部　秀夫　著書
「癒やしの子育てネットワーク」代表

子どもが泣くと、親はなぜ切なくなり、一刻も早く泣きやませたくなるのでしょうか。子どもの泣き声がキンキン耳に響いて、居ても立ってもいられなくなるのは、いったいなぜなのでしょうか？

早くなんとかしなくてはと気がせき、でもどうしたらいいのとオロオロしたり、子どもから責められているように感じて、私ってダメな親だと思うほどに胸がズキズキうずいたり、あげくの果てに、いつまで泣いてばかりいるのとばかりにムラムラと怒りがこみあげてくることさえあるのは、なぜでしょうか？

この謎が解けると、子育ては一気にラクになるはず。それというのも、「泣く」という、子どもにとってごく自然な感情表現を、私たち大人がうまく受け止められずにいるために、ややもすると、親子の気持ちの歯車が微妙にかみ合いにくくなってしまうからです。



泣くという感情表現を止めてしまうと、感情そのものがおさえられてしまいます。悲しい・悔しいといった泣きたくなる感情だけでなく、楽しい・嬉しいといった感情まで抑えられがちです。でも、感じることは心の原動力！！「感じる心」が弱ければ「生きる力」は育ちません。

つまり、「泣く力」は「感じる力」であり、「生きる力」そのものなのです。子どもにとって「泣くこと」がどんな意味をもつのか、それがわかれば、まさに目からウロコ。親のつらい思い込みがなくなって、子どもについての新しい展望が開けるでしょう。・・・

この本の著者の阿部先生は、子育てが上手くいかずに苦しんでいる親子の相談を受けながら、”癒やしの子育てネットワーク”の代表を務めておられます。今回はその中の一部を紹介させていただきました。

４月、こども園でもたくさんの声が響きます。その泣き声を保護者の方と、保育者で受け止め、一緒に子どもたち自らの育つ力を見守っていけたらと願っています。

この本には、泣くことで、自分の本当の気持ちに気づく瞬間があると書かれていました。泣くことで、自分の気持ちをすっきり整理して、社会の中で生きていくためのコミュニケーション力に繋げていくことは、子どもも、大人も大事な生きる力となることではないでしょうか。子育てをしながら、実は私たち大人も成長させてもらっているのです。

園長